

## コーチの立場から見たアネテオリンピック（柔道）

岡田 弘隆

### オリンピック出場枠について

五輪では出場者の数に制限が有り、まず五輪前年の世界選手権大会において、各階級 5 位に入賞した 6 カ国に出場権が与えられる。その他は 5 大陸に割り当てられた枠を、それぞれの大陸で決められた方法によって争うことになる。アジアの出場枠は男子が 5、女子が 3 である。アジア選手権大会とアジア大会の順位をポイント化したものを合計してランキングが決定され、その上位 5 カ国（女子は 3 カ国）が出場権を得る運びとなっている。日本の男子の場合、大阪世界選手権大会で出場枠を獲得した階級は 60kg 級、81kg 級、100kg 級、100kg 超級の 4 階級であった。さらに、73kg 級、90kg 級においては前年のアジア選手権大会までのポイントで既に出場権獲得が決定しており、66kg 級のみ 5 月のアジア選手権大会（カザフスタン）で出場権獲得を目指すこととなった。そこで内柴が 5 位となり、日本は男女とも全階級に出場できることとなった。アネテ五輪に男女 14 階級すべてにエントリーできた国は開催国のギリシャを除いて日本だけであった。

### 日本代表選考について

大阪世界選手権大会以降、10 月のアジア選手権大会、11 月の講道館杯、1～3 月の欧州国際大会、4 月の全日本選抜体重別選手権大会、全日本選手権大会の成績をもとに、各階級で最も金メダルに近い選手を代表に選考した。

### 代表決定後の強化および調整について（男子）

4 月 4 日に 90kg 級までの代表が決定し、全日本選手権大会に出場する泉を除く 81kg 級までの代表は、2 週間後には早速、韓国において合宿を行った。軽量、中量暮らすに強豪がひしめく韓国での合宿は、非常に内容が濃く、充実したものであった。

5 月 15 日、16 日、カザフスタンで行われたアジア選手権大会には、出場枠を掛けた内柴の他、高松、塘内、泉、鈴木が出場した。無差別の世界チ

ャンピオンである鈴木は、100kg 超級での代表経験がなく、アジアで決められている五輪出場のための条件を満たすために、急きょ出場することとなった。他の 3 選手はテストマッチとして位置付けて大会に臨んだ。結局、金メダル無しという悲惨な結果に終わったが、それぞれの選手が課題を確認できる等、有意義な大会となった。

その後、5 月末には個別分散合宿を行い、6 月 5 日から 13 日まではフランス・インセップにおいて、6 月 29 日から 7 月 9 日まで、および 7 月 17 日から 23 日までは長野・富士見高原において合宿を行った。その後、7 月 27 日から 31 日までは、筑波大学に集まってそれぞれ調整練習を行い、81kg 級までの 4 選手は 8 月 7 日に出発して、8 日にアテネに入った。また重量 3 階級は、延岡で最終調整合宿を行い、8 月 11 日に出発、12 日にアテネ入りした。

### 現地での調整について

現地では、選手村から車で 30 分程のところにある体育館を日本選手団専用で借り、調整練習を行った。今回は、選手が少しでも調整しやすいようにという配慮から、2 人の選手に対し 3 人（最重量級は 1 人に 2 人）の練習相手を研修団として帯同した。また、前回同様、栄養士による食事のサポートも万全であった。勿論、ドクター、トレーナーも選手団として選手村に入り、選手の体調管理にも万全を期した。残念ながら高松が現地入りしてすぐに扁桃腺を腫らして発熱し、4 日間寝込んでしまったが、その他の選手はほぼベストの状態ですべて試合に臨むことができた。

### オリンピックの結果

初日、前人未到の 3 連覇を目指す 60kg 級・野村は、全く危なげのない戦いぶりでものを寄せつけず、完勝。準決勝までは全て「一本」勝ち。決勝こそ「一本」を奪うことはできなかったものの、変則柔道のヘルギア二（グルジア）に対し、常に自分の間合いを保ち、相手に柔道をさせなかった。こ

の階級での3連覇は将来的にも難しいと思われる。この偉業達成に対し心から敬意を表し、拍手を送りたい。

2日目、66kg級・内柴は絶好調。これ以上はないという程のプレッシャーをアジア選手権大会で経験し、本番の舞台では平常心で、思う存分自分の柔道を展開、全て「一本」勝ちで五輪チャンピオンとなった。昨年、60kg級で減量を失敗し地獄を見た男が、階級を変えて見事に頂点に立ったのは立派である。一方で、この階級の優勝候補であった世界選手権2連覇中のミレスマイリ(イラン)が、組み合わせてイスラエル選手との対戦が決まり、国の決定により対戦を拒否し(計量失敗ということで)出場しなかったのは残念であった。

3日目、73kg級・高松は初戦でケブキシビリ(グルジア)と対戦し、跳腰で「技あり」を奪われ敗退。敗者復活戦もなし。前述の通り体調を崩したのが響き、本来の柔道ができなかったことが悔やまれる。この悔しさを忘れず、もう一度頂点を目指して頑張ってもらいたい。この階級の決勝は、ミュンヘンの世界チャンピオン・マカロフ(ロシア)と大阪の世界チャンピオン・リー・ウォン・ヒ(韓国)の対戦となり、激しい攻防の末、リーが小内刈で「一本」勝ち。非常に見応えのある素晴らしい内容の決勝戦であった。

4日目、81kg級・塘内は初戦でノツソフ(ロシア)に完敗。敗者復活戦でもメロニ(イタリア)に「一本」負けで上位入賞はならず。仕上がりはまずまずのように思えたが、残念ながら力を発揮できなかった。優勝は、決勝でゴンチュク(ウクライナ)を下した地元ギリシャの新鋭・イリアディス。昨年までは73kg級の選手で今年から81kg級に転向し、ヨーロッパチャンピオン、そしてオリンピックチャンピオンとなった。翌日、90kg級で優勝したズビアダウリ(グルジア)の弟でもある。地元選手の優勝に会場は大いに沸いた。

5日目、90kg級・泉は初戦で大阪世界選手権3位のクハレンカ(ベラルーシ)を開始10秒、大外刈で倒して勢いに乗り、準決勝に進出。準決勝では大阪の世界チャンピオン・ファン・ヒー・テ(韓国)を激戦の末、ラスト数秒で「技あり」を奪って下し、決勝でミュンヘン、大阪世界選手権2位のズビアダウリと対戦した。先に「指導」を一つ受けていた泉が、3分過ぎに仕掛けた大外刈をズビアダウリが豪快に返して「一本」。泉、惜しくも

金メダルは届かず。しかし、この階級(以前の86kg級も含む)では日本人として初めて決勝に進出したことは評価できる。

6日目、100kg級・井上は4回戦でバンデギースト(オランダ)によもやの「一本」負け。敗者復活戦でも敗れてメダルにも届かなかった。「優勝候補」ではなく、「優勝確実」と目されていた井上には、本人にしかわからないプレッシャーがあったことは間違いない。春先からの膝や肩等の怪我のため、コンディショニングに関する不安もあったであろう。1回戦と2回戦のコバチ(ハンガリー)戦が中3試合であったため、「早く決めてやろう」という心理状態が掛け急ぎを招き、リズムを崩したとも考えられる。いずれにせよ、幾つかの原因が重なり、1回戦から本来の柔道ができないまま井上のアテネは終わってしまった。しかし、世界中の誰もが、もう一度あの強い井上康生が世界の舞台に戻ってくることを信じて疑わない。捲土重来を期待したい。結局、この階級はマカロウ(ベラルーシ)がジャン・スン・ホ(韓国)を下して優勝。

最終日、100kg 超級・鈴木は実力を発揮。初戦から足技が冴え、得意の内股が切れた。大方の予想通りの対戦となったトメノフ(ロシア)との決勝戦では、やはり足技で締めくくった。接近戦をしたいトメノフに対し、鈴木は巧く足を使いながら横の動きでトメノフの力をずらし、最終は小外刈「一本」で仕留めた。昨年、世界チャンピオンとなり、今年、全日本チャンピオン、五輪チャンピオンとなった鈴木を組み手の強さ、体捌き、崩しの巧さが光った。本来100kg級の鈴木が、大男達を次々と投げ飛ばす姿は世界中の柔道ファンを魅了した。また、日本にとっては前日の悪夢(井上の敗退)を吹き飛ばす、価値ある優勝であった。

結局、日本男子チームは金メダル3つ、銀メダル1つを獲得し、前回のシドニー大会と全く同数であった。男子では17カ国(女子は12カ国、全体で24カ国)がメダルを獲得したが、複数の金メダルを獲得した国は日本だけであった。女子の金メダル5つ、銀メダル1つという完璧な結果には及ばないものの、各階級で10人から20人近くも優勝を狙える力を持った選手がいる中で、日本選手はよく健闘したといえる。結果だけではなく、選手は「しっかり組んで最後まで『一本』を目指して攻め抜く柔道」を貫き、日本柔道の素晴らし

さを世界にアピールしてくれた。

表1. 国別の獲得メダル

総合 順位	国	男				女				計			
		金	銀	銅	計	金	銀	銅	計	金	銀	銅	計
1	日本	3	1	0	4	5	1	0	6	8	2	0	10
2	中国	0	0	0	0	1	1	3	5	1	1	3	5
3	韓国	1	1	1	3	0	0	0	0	1	1	1	3
4	グルジア	1	1	0	2	0	0	0	0	1	1	0	2
5	ドイツ	0	0	1	1	1	0	2	3	1	0	3	4
6	ベラルーシ	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1
6	ギリシャ	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1
8	ロシア	0	2	2	4	0	0	1	1	0	2	3	5
9	キューバ	0	0	1	1	0	1	4	5	0	1	5	6
10	オランダ	0	0	2	2	0	1	1	2	0	1	3	4
11	オーストリア	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1
11	フランス	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1
11	北朝鮮	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1
11	スロバキア	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1
11	ウクライナ	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
16	ブラジル	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	2	2
17	ベルギー	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1
17	ブルガリア	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1
17	エストニア	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1
17	イスラエル	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1
17	イタリア	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1
17	モンゴル	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1
17	スロベニア	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1
17	アメリカ	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1

全体の試合内容は、昨年の世界選手権大会でもそうであったように、「一本」が多く、非常に分かりやすく、面白かった。ゴールデンスコアの導入により、分かりづらい「判定」が全くなかったのもよかった。罰則の与え方も以前程早分くなく、技重視の審判がなされたことは日本にとっても有り難い傾向であったし、見ている人にも分かりやすかったのではないだろうか。また、負傷により選手がドクターを呼べなくなったことも試合展開を早くし、疲れた選手が休めなくなる等、好影響を与えた。さらに、厳選された審判員の技術レベルは高く、 Jury もしっかり役割を果たす等、前回のようないざこざがなかったことも今大会を盛り上げる一因となった。

